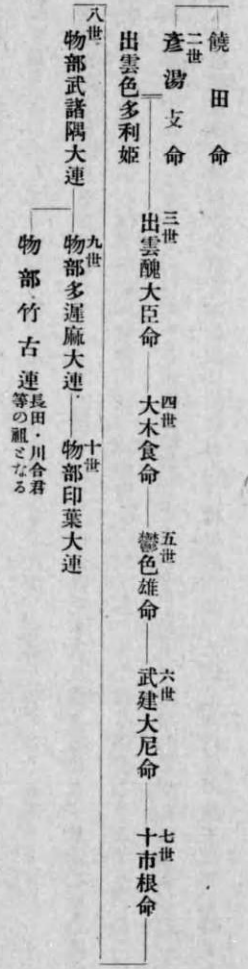
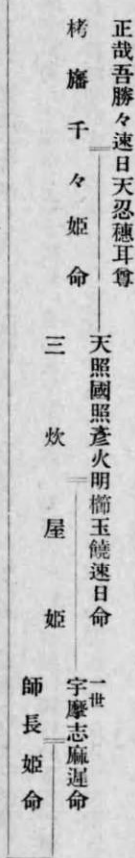


るが、射手十四名が式の如く「鬼」の的を射るのは、追に大がりの神事であります。又鎮魂祭は新嘗祭の前夜行はるゝもので、即ち御祭神が神武朝に執行ひ給うたと傳へる所の玉緒結びの行事を行ひ、二三四五六七八九十の十度にして一行事を終り、その終る毎に形代の箱を由良由良に振り動かすと云ふ舊事紀の傳へさながらの古傳祭であります。されば社傳はどこまでも神武朝以來の御鎮座と主張してゐるのであります。

しかし又繼體天皇の八年九月に始めて當社の御創建が行はれたといふことは、極めて意義の深いことと考へられます。これは八百山の神陵についても別に考察を要するわけで、それは決して獨立のものでなく、この地に數多ある他の古墳墓と共に、當地における物部氏の族長の關係に包含せしめて考ふべきでありませう。しかるに當地における物部氏の族長の正統は、即ち國造金子男爵家であります。これは物部竹子連ものべのたけこむらじより出でると傳へ、舊事紀によれば、竹古連は



とあつて、この竹古連は金子氏の系圖によると、石見の國造として當國に來り、川合村の長田に居住して長田國造と稱へた。これを初代とし、十二代道章は大化年中に安濃郡領をつとめ、二十四代道美は建久三年當社々領の地頭職となり、二十九代宗忠は、建武年中三隅・佐和氏等に應じ北軍なる小笠原・武田氏の兵と戦つて、鶴ヶ城を失つたこともありませう。三十三代賢忠の時毛利・尼子の兵と當村に戦つて、當社は兵燹に罹つたのも特筆すべきことであります。かくて四十七代有郷は有久の第五子であるが、明治八年華族に列し同十七年男爵を授けられました。これを初代の宮司とし今は一族庵原氏に至るまで、連綿として御祭神の神胤を以つて奉仕し來つてゐるわけであります。

彌つてかの繼體天皇の八年秋九月はじめて社殿の御造營があつたと傳へてゐるのでありますが、三代實錄によれば、貞觀十一年三月二十二日に石見國從五位上物部神に正五位下を授け奉るとあり、又同十